

赤い羽根の育兒たち

……早いもので、今年もはや師走の足音をきくようになりまし
 ところ、このあわただしい足音を私たちがこれからの一ヶ月、冷たい冬空の下で、或はこがらし吹く夜に、ともするとみぞれ降る軒の下でひしひしと
 感ずることでありましょう。しかし、こゝでふつと心の中に揺き消すことのできないのは、年の暮も新年もない、数多くの貧しい人たちのことであります
 そこで今年もこのような人々を私たちが周囲の愛情と力で助けてゆこうと、才末助けあい運動が今月の一日から二十五日間にわたってくり展げられ
 います。これに先がけて十月に行われた共同募金赤い羽根の運動も、県下皆さんの篤いご協力によりまして、期待どおりの成果をおさめることができ
 ます。そこで今月は、皆さんの赤い羽根の行方を追って皆さんと共に、上益城郡矢部町の中心からバスで約二十分ほど離れた共同募金受配施設「明光保育園」
 を訪ねてみることにいたしました。

明光保育園を訪ねて……



社会福祉のうた

青い 空には
 虹が立つ
 辛い涙も笑顔にかくし
 今日を 明るく
 生きぬけば
 貧しい庭にも花は咲く
 そうですくしあわせは
 みんなの力で つくるもの
 (社会福祉のうた)

すがすがしい
 自然のなかで
 白小野というところでバスを降り、ち
 ようど通りか、つた野良着すがたのお婆
 さんの教えるま、一つのゆるやかな小
 径を歩きますと、間もなくその左手に「
 明光保育園」と書かれたベンキの塗りも
 まだ真新しい扉が目に入りました。
 中へ入って二百坪ほどの広場を見渡す
 と、左側の一隅にはブランコと滑り台が
 右手には五十坪ぐらいの明るい建物。こ
 の小高い丘の上に坐っています。垣根ぞ
 いのす、きき穂波が向うの濃い山の繁み
 と美しいコントラストをつくって、いか
 にもすがすがしい感じに包まれていま
 す。
 いまはちようどお昼休み。こどもたち
 は思い／＼に遊んでいます。
 滑り台の上で鈴なりになつてい子、
 バネのような両脚を思いきり屈伸させな
 がら、しがみついたブランコを水平に振
 っている子、そうか／＼と、庭の片す

みではぼつんと仲間から離れて砂あそび
 に余念のない子、秋のやわらかな日溜り
 で糸とりや夢中な女の子、中でも、ひと
 きわ元気なのは、す、きの穂を引き抜い
 て運動場をころ狭しどばかりに追い馳
 けつこをくりかえしながら、追われる子
 はと……みると、あれよあれよと思う間
 に四、五メートルもある崖ふちを登って
 逃げてゆきます。
 このような子供たちのはちきれそうな
 姿を眼で追いつながら建物の中へ入ると、
 その事務室では保母さんが前日の保育
 日誌をつけているところでした。ペンを
 おいたところで、それをちよつと見せて
 もらいます。

かがつてみますと
 「いま預かつているこどもたちはちよ
 うど五十名で、そのうち男の子が二十九
 名います。この中に乳児が一名居りま
 が、あとは四、五才の子たちが大半を占
 めているんです。こどもたちに対する直
 接のお世話には私と浜崎さんの二人がや
 りまして、このほかに栄養士の免許をもつ
 調理士さんと助手の方がいらつしやいま
 す。
 もう毎日が眼の廻るような忙しさに追
 われるのが私たち保母としての本来の仕
 事なんです。ただ私たち二人はこゝに
 住み込みなので、やはりそれだけに仕事
 もいろいろとふえてまいり、夜になりま
 すとね、文字どおり綿のようにくつたり
 と疲れてしまふんですよ」「なるほどね
 さつまで、こどもたちの遊んでいる姿
 をちよつと眺めていたんですが、みんな
 かなか足が強く、すこく元気そうです
 ね」
 と云いますと、猿渡さんはにっこりと
 笑つて背いてみせます。

たしかに山村と平坦地にある都市とで
 は、生活環境のいろいろな違いが、やは
 り子供たちの肌あいの中にまで素直にあ
 らわれていて、しずかな山村の美しい自
 然の中で、飾気のない童心はなんとなく
 荒削りのま、太く伸びてゆこうとして
 いるのです。
 「こどもたちの家業の方はどんなにな
 つていますか」
 「……そうですね、七〇パーセントが
 純農家で、あとは兼ねてやつていてこ
 ろも多いようです」

ちと窓を開けたり、お掃除をするのも
 んとなく愉しいもんですよ」
 「なかなか大変ですね。ところで、い
 ちばん遠いところから出てくる子たち
 は、こゝからのどのぐらいの距離にある
 ですか」
 「ちようど四キロぐらいからです。そ
 んな子たちは殆んど町の学校へ通う兄
 さんか姉さんにつき添われて往復するん
 です。それから、帰りなどにもし兄さん
 姉さんの方が早かつた場合は、この保
 園で時間まで待つてもらふことにしてい
 るんです。もつとも、午後の四時すぎに
 は子どもたちを帰すことにしていますの
 で……」
 「すると、子どもたちの送り迎えはや
 らないつていうことですね」
 「いえ、入園後一ヶ月ぐらいのあい
 だは、それをやつているんです。この
 ほか、とくに農繁期の場合などで、親
 たちの帰りがおそくなる場合は、私たち
 が夕方五時迄には送り送とけることにし
 ているんです」

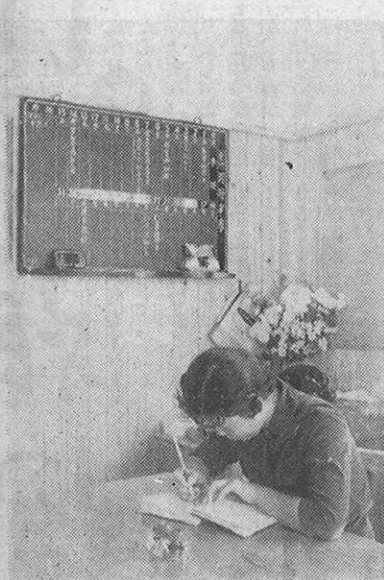
保育勤務の欄を、登園、お集り、一斉
 保育、自由保育、お帰りの……と順序に読
 んでゆきながら「反省」というところで
 眼を止めますと、こんなふうな書かれて
 ありました。

反省
 雨の日はどうしてもふさぎこんでし
 まう。何度注意しても聞きわけのなか
 つた子供たちを、朝からひどく叱つて
 しまつた。くしまつたと思つたけれ
 どもうおそい。そこで、私が叱つた理
 由をていねいに説明したあとでぐこめ
 んねと云うと、子供たちの硬い表情
 がだんだんと溶けてゆくのが手に取れ
 るように判つた。もちろん、その子た
 ちと私とはすぐ仲良しになつた。

農繁期も安心して
 「そうしますと、いまは稲の刈入れも
 すんで脱穀というところ、つまり農繁期
 ですから、こどもの親たちは保育所のお
 かげで、安心して仕事のはかどりもい
 つていうわけですね」
 「え、そうなんです。何しろ、早い
 子は朝の七時前から田んぼや野良仕事に
 でかけるお父さんやお母さんたちに連れ
 られて此処にや
 つてくるん
 です。だから、
 私たちはそのよ
 うな時期はもつ
 と早く起きて子
 どもたちを待つ
 ているわけ
 です。疲れ気味に
 すが、朝のきれいな
 空気を吸い
 ながら、その子た

労働力の不足が
 子供を野放しに
 こゝまでゆきとどいておれば……など
 と感心しているところへ、こゝの園長で
 ある赤星昭暁さんが姿を現しました。赤
 星さんは、こゝから四十分ほど先にある
 万坂というところに家を持つて居られる
 のです。
 「うかがいますと、真宗妙高寺の住職
 をなさつていらつしやるそうです……」

太く伸びゆく子たち
 県の保母養成所を出られて歳もまだ浅
 い猿渡チカ子さんに、すこしようすをう



保育日誌をつける保母さん

保育日誌をつける保母さん
 保育日誌をつける保母さん